

“教科書の思い出”

教育委員会委員

橋本 和明

来年度からの公立中学校の教科書採択が無事終わりました。それぞれの教科で、複数の出版会社の教科書が候補に挙がっていました。いずれも文部科学省の学習指導要領に基づいて作られ、基準をクリアーしているもので、しかもどれを取っても細かなところまで工夫や配慮がなされていました。それだけに、もっとも望ましいと思われる教科書を一つだけ選ぶ作業はなかなかたいへんな作業となりました。特に、今回はどの教科書もさまざまな生徒にも学びやすいようにユニバーサル・デザインがなされ、しかも自発的・主体的に学習に取り組めるように、アクティブ・ラーニングを取り入れていることが印象に残りました。

ところで、教科書というのは、その時の学習のための道具というだけではないような気がします。後になって、同じ時期にこの教科書で学んだという同年代の証しになることもしばしばあります。例えば、「僕は数学の教科書は〇〇（出版名）だった」、「私は歴史の教科書に△△の写真が掲載されていたのを印象深く覚えている」というように、当時を振り返る貴重な資料に教科書がなったりします。青春時代から数十年経って、その当時のヒット曲を同年代の者が懐かしく口ずさむような感覚に似ているのかもしれませんが。同年代でしか歌えない懐かしのメロディなのです。教科書にもそんな魅力が隠されていると思います。

家の押し入れの奥に、昔使っていた教科書を見つけ出すことができるかもしれません。その教科書は当時使っていたランドセルとセットになっていたことを思い出したり、教科書を開けてみると、手垢や赤線の跡が今も残っていたりします。それとも、授業中にした落書きが発見され、横にいた同級生の顔がふと思い出されるかもしれません。不思議なことに、教科書にはそんな哀愁さえ漂い、他の参考書や書籍にはない世界を楽しめたりします。